

平成 28 年度 JACET 中国・四国支部

秋季研究大会プログラム&発表要旨

日時：10月22日（土）13:00 ～ 受付

場所：山口大学教育学部（山口市吉田1677-1 吉田キャンパス）

大会テーマ：「能動的な学習と授業参加を促す英語授業」

13:00 ～ 受付

13:30～13:40 開会式

開会の辞

支部長 松岡博信（安田女子大学）

大会実行委員長 高橋俊章（山口大学）

13:45～15:10 研究発表

15:20～16:50 講演・ワークショップ

第1室（22番教室）

司会：岩井千秋（広島市立大学）

発表1：授業外学習と協同学習を取り入れた TOEIC 語彙指導について

－上位レベルと中位レベルの場合－

(13:45－14:10)

三宅美鈴（広島国際大学）

山中英理子（広島国際大学）

発表2：YASUDA SYSTEM と Moodle の統合による「シナリオ英語」

(14:15－14:40)

松岡博信（安田女子大学）

発表3：デジタル機器を利用した大学生の英語学習実態に関する調査

(14:45－15:10)

榎田一路（広島大学）

森田光宏（広島大学）

坂上辰也（広島大学）

鬼田崇作（広島大学）

第2室（23番教室）

司会：岩中貴裕（山口学芸大学）

発表1：ポライトネスから見た日本人英語学習者の“I think”使用

(13:45－14:10)

小田希望（就実大学）

発表2：高専1年生に対する体育 CLIL の可能性

－英語を使用したサッカーの授業を事例として－

(14:15－14:40)

二五義博（海上保安大学校）

伊藤耕作（宇部工業高等専門学校）

発表3：第二言語学習者の言語活動におけるワーキングメモリの働きについて（14:45－15:10）

藤村美希（安田女子大学大学院）

（休憩：15:10－15:20）

（15:20－16:50）

講演・ワークショップ（22 教室）

授業が変わる！英語教師のためのアクティブ・ラーニング型授業づくり

～「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を実現する授業改善の試み」～

講演者 上山晋平（福山市立中・高等学校）

16:50－ 17:00

閉会式

開会の辞

副支部長 岩井千秋（広島市立大学）

懇親会 場所：月と兎（湯田温泉）（大学より徒歩 10 分？）

時間：18:00～ 20:00

費用：4,000 円（飲み放題）

研究発表 要旨

第1室

発表1： 授業外学習と協同学習を取り入れた TOEIC 語彙指導について

－上位レベルと中位レベルの場合－

TOEIC テストに準じた語彙指導を、授業外学習と協同学習を取り入れながら異なる2つのレベル6クラス（上位クラス3、中位クラス3）、157名の学生を対象に実施した。目的は、レベルの異なる学生が授業外学習と協同学習を行いながら、ほぼ同じ語彙指導を受けた場合、語彙習得と授業内態度にどのような違いが見られるのかを明らかにし、語彙指導のあり方を探ることである。方法は、両レベルの学生に1ユニットを解答してくることを宿題（授業外学習）とし、教員に授業の2日前までに提出させた。教員は提出の確認のみを行い、授業初めにそれを返却した。その後、クラスメート同士で互いに答え合わせをしながら、解答を確認させた（協同学習）。教員はその後、解答と解説を行い、2ユニット終了する毎に単語小テスト（10問）を行った。第1週目と第16週目に行った事前・事後テスト（75問、35分）は、ターゲット語30語と非ターゲット語45語（錯乱肢や問題文に登場）を出題し、ターゲット語の出題文は授業で扱った文とは異なるもので実施した。結果は、語彙習得においては、上位レベルクラスでは、ターゲット語、非ターゲット語ともに、事後テストで有意に正答数が増していたが、中位レベルクラスでは、ターゲット語のみが有意に正答数が増していた。授業内態度においては、アンケート調査より上位・中位のレベルに関係なく、協同学習を行うことにより、解答に確信を持って発表できたという意見や、友人とコミュニケーションを持ちながら学べたなどの意見があり、協同学習が予習のモチベーションになっていた。語彙指導の教育的示唆として、予習のモチベーションを高めるためにも協同学習を行うことが勧められる。また、語彙指導においては、上位レベルでは、ターゲット

語のみならず、選択肢や問題文中での語彙まで指導を行なうことが好ましく、中位レベルでは、ターゲット語に集中して指導した方が効果的である可能性が高いことが挙げられる。

発表2：YASUDA SYSTEM と Moodle の統合による「シナリオ英語」

本発表は、筆者の所属する大学の文学部英語英米文学科3年生対象の「シナリオ英語」におけるeラーニングによる授業実践の報告である。本授業のシラバスは以下のごとくである。「パブリックドメインとなった映画「ローマの休日」のシナリオを利用して、登場人物の台詞のディクテーションを行い、かつ自然な英語のスピードに慣れ親しみ、機能・場面に相応しい英語表現および固定表現を修得するための演習をWEBを用いて行うものである。特に、台詞が有する機能に着目し、台詞を発した登場人物の気持ちと心情の理解に努める。また、映画やその台詞を取り巻く歴史・文化・情勢に関する造詣も深めたい。」本授業は、私たち安田女子大学の英語教員が共同で開発したYASUDA SYSTEMを用いる。Moodleをプラットフォームとして設定し、そのコースメニューからYASUDA SYSTEMによって教材を送出するという形態の授業である。

YASUDA SYSTEM は次の4つのWBTプログラムから成っている。

- KED システム (ディクテーション)
- QM システム (リスニング)
- サッと英作! (和文英訳)
- サッと選択! (多肢選択問題)

これらは産学連携の一環として、広島市に拠点を置く(株)北辰映電より教育機関を対象に販売されている。授業は、まず前時のディクテーションスクリプトにおける課題項目(語句および文)の復習から始まり、その後にそれらの確認テストを行う。これにはMoodleの小テスト機能を用いる。次に、DVDを視聴する前にスキーマの活性化のために、視聴場面に出現する語彙・表現の予習を「サッと選択!」を用いて行う。視聴後には、場面の会話についての質問に対する解答を「サッと選択!」上の4択問題から選ぶ演習を行う。さらに5箇所空欄箇所の英文を聞いて画面に打ち込むKEDシステムを利用したディクテーション演習を行う。ディクテーション終了後には、そのスクリプトを配布し、語句や表現についての説明・確認を行う。最後に本時で学習した題材の総復習として、「サッと英作!」を用いた和文英訳演習を行う。発表時には、実際の教材を具体的に提示して解説する予定である。

発表3：デジタル機器を利用した大学生の英語学習実態に関する調査

パソコンやスマートフォン、タブレット等のデジタル機器の普及により、ウェブ上にある膨大な量の教材が、時間や場所を問わず活用できるようになった。授業時間の限られた大学英語教育においては、こうしたデジタル機器を授業時間外に積極的に活用することが、英語力の向上に効果的であると考えられる。発表者の勤務する大学でも、教養教育の英語科目において各種WBT(Web-Based Training)教材を活用した授業実践が展開されている一方で、ポッドキャストによる自学自習用英語教材の配信も行われている。さらに2015年度入学生より、ノートパソコンの必携化も開始された。こうした背景を受け、大学生におけるデジタルインフラの普及率、および個人所有のデジタル機器を活用した授業時間外英語学習の実態を探り、大学英語教育においてモバイル環境を活用した学習をさらに推進するためのアンケート調査を実施した。対象としたのは発表者の勤務する大学の1年生約1,000名で、2016年度前期にオンラインでアンケートを実施し、767名の回答を得た。この結果、ノートパソコンやスマートフォンの高い普及率が確認されたが、一

方でデジタル機器を活用した英語学習を行っている学生は全体の22%という結果となった。本発表では、上記アンケート調査の概要と、その結果の詳細を報告する。

第2室

発表1：ポライトネスから見た日本人英語学習者の“I think”使用

本発表は、日本人英語学習者による“I think”の使用に焦点を絞り、「と思う」から“I think”への機械的置換の背景にある原因を語用論的観点、とくにポライトネスの観点から考察することを目的とする。例えば、日本人英語学習者の生み出す不自然な英語の中には“I think I want to go to Yoshima again.”（もう一度余島に行きたいと思います）のような“I think”の使用がよく見られる。このような不自然（あるいは誤用）と判断される“I think”の使用は、日本人英語学習者自身が誤りだと認識していない場合が多く、また文法的には目立った誤りではないために授業などで注意を向けられることも少ない。本研究は、西谷・中崎・ダンテ（2016）が指摘した意味的に冗長である“I think”の使用を語用論的転移の事例と捉え直し、日本語と英語のポライトネス・ストラテジーの違いが背景に存在すると論じる。具体的には、日本語がネガティブ・ポライトネス優勢の言語であることが要因となり、日本人英語学習者は英語のアウトプットにもそのまま日本語のポライトネス・ストラテジーを適用して「と思う」に対応する“I think”を付加するものだと推測される。さらに、外国語教育において日本語とのポライトネス・ストラテジーの違いを明示的に意識させるような指導が必要であることも提案したい。

発表2：高専1年生に対する体育CLILの可能性

－英語を使用したサッカーの授業を事例として－

現在日本では、外国語の効果的な習得方法の1つとしてCLIL（内容言語統合型学習）が注目されつつある。CLILとは、「内容」と「言語」の同時習得に加え、「思考」や「協学」の要素も取り入れた、より質の高い学びを目指す学習者中心の外国語指導法のことである。他教科内容との組み合わせとしては、英語と算数（数学）、理科や社会とは既に実践例があるが、英語指導の際に実技教科を対象とした研究はまだほとんどない。そこで本発表の目的は、体育（サッカー）の内容を英語で学ぶことが、内容への動機づけ、コミュニケーション能力育成、思考や協同学習の視点でいかなる効果があるかを探ることにある。研究方法としては、山口県内の国立工業高等専門学校1年生3クラス105名を対象として、まず、CLILの4つの軸に基づく教材を作成し、授業案をデザインした。その際、活動の各場面において、サッカーの効果的な戦術を話し合ったり、ワークシートを利用してサッカークイズに英語で答えたりするなどコミュニケーション能力育成のための工夫をした。授業展開は、挨拶など（5分）→グループワーク（20分）→作戦タイム（10分）→メインゲーム（50分）→振り返り（5分）である。次に、授業後には学習者の反応を見るため、選択式（4点法）と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。研究結果、教科横断的な授業による利点や課題点がいくつか明らかになったが、その詳細は当日の発表で紹介する。

発表3：

ワーキングメモリには、処理と保持の2つの働きがあると言われている。こうしたワーキングメモリの働きは、第2言語学習者のリーディングやリスニングという課題と言語活動にどのよう

に関わっているのだろうか。また、リーディングとリスニングの間において、ワーキングメモリの働きには顕著な違いがあるのだろうか。本発表では、これまでのワーキングメモリの定義や機能についてのまとめと、さらにワーキングメモリを測定したリーディング、リスニングテストの結果を発表する。このリーディングとリスニングテストにおいては、処理能力を測る課題として正誤判断を、そして保持能力を測る課題として文末再生を取り入れ、学習者のワーキングメモリの働きについて調査した。分散分析の結果、リーディングおよびリスニングテストの両方において文末再生の主効果が認められたが、正誤判断についてはリスニングテストにのみ認められ、リーディングテストにおいては認められなかった。このようにリーディング、リスニングテストにおいてワーキングメモリの働きに差異がみられた。

講演・ワークショップ要旨

授業が変わる！英語教師のためのアクティブ・ラーニング型授業づくり
～「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を実現する授業改善の試み～

現在、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング〔以下AL〕）の視点からの授業（改善）が求められている。これを実現するには、「ALとは何であり、何を指すものなのか」今一度理念を整理し、育成すべき資質・能力を確認したうえで、個々の立場で最適な方法を工夫し続けることが重要だと考える。本ワークショップでは、「ICEモデル」や「アクティブ・ラーニング型英語授業10箇条」などALを促すポイントを概観したうえで、AL型授業への様々なアプローチのうち中高の一般的な教室でまず取り組みやすい、言語活動における「習得」型と「活用」型のAL型授業を実現する工夫を中心に取り上げる。公立の中高一貫校の教師が、通常の授業をどう工夫して「主体的・対話的で深い学び」にしようとしているのかを体験的に学び合える機会にしたい。そのうえで最終的に、個々が学んだ情報をシェアしそれぞれの状況に合うようカスタマイズすることで、授業実践や指導の際にヒントとなる気づきにあふれた講座にできたらと考えている。